

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 60

2009年5月

Special to the Newsletter

越境するアメリカ史

Ian Tyrrell, *Transnational Nation : United States History in Global Perspective since 1789* (Palgrave Macmillan, 2007) を読んで

藤本 茂生

はじめに アメリカ合衆国の歴史及び地域研究における最近の動向

周知のとおり、歴史及び地域研究においてグローバル化、トランスナショナル化〔越境化〕が進んでいる。本学会は、こうした研究動向にいち早く対応し、既に、この動向に関連する著作を三作 『アメリカス学の現在』(2003年)、『アメリカス世界のなかの「帝国」』(2005年)、『アメリカス世界における移動とグローバリゼーション』(2008年) を出版し、グローバルな視点からのアメリカス研究に実績を残している。なかでも、「越境する日系人」と題したタイトルを第一章につけた『アメリカス学の現在』は、2004年刊行の『史学雑誌』「回顧と展望：北アメリカ」の冒頭に紹介されて、広く全国に知られた⁽¹⁾。

こうした状況を踏まえて、アメリカ合衆国〔以下、アメリカと表記〕の歴史及び地域に関する研究動向をみると、この分野の研究も例外ではないことがわかる。最近の例を引くと、「日本アメリカ史学会」の雑誌『アメリカ史研究』30号(2007年)「特集：トランスナショナル・ヒストリー再考 国境を越える歴史叙述の可能性と課題」、「国際アメリカ学会」大会(2007年9月リスボン)発表各テーマ、アメリカ国内では、「アメリカ歴史家協会」大会(2009年3月シアトル)テーマ“History Without Boundaries”、「アメリカ歴史学会」大会(2009年1月ニューヨーク)テーマ“Globalizing Historiography”が示すとおりである。そして、この動向を最も象徴するのは、*The Journal of Transnational American Studies (JTAS)* が2008年6月に創刊されたことであろう。この「雑誌概要」によると、JTASは、「国境横断的な諸文脈におけるアメリカ文化の学際的研究を拡大しようとする査読制のオンライン・ジャーナル」であり、「多くの研究者が国内外における様々な境界をますます問い直すようになり、そうした境界群をまたぐかたちで繰り広げられる多種多様な横断や交換に注意を払っている今日、JTASはグローバルな学術共同体に身を置くアメリカ研究者たちが自由に参加できるオープン・アクセス型のフォーラムとして活動」すると謳っている。そして、以上のようなトランスナショナルな視点に基づくアメリカ史の著作が、最近出版され続けている⁽²⁾。

I. Tyrrell, *Transnational Nation* (2007年) について

イアン・ティレル先生は、ニュー・サウス・ウェールズ大学歴史学教授であり、オーストラ

リアにおけるアメリカ史研究の重鎮として知られ、主な著作に *Woman's World / Woman's Empire: The Woman's Christian Temperance Union in International Perspective* (University of North Carolina Press, 1991), *True Gardens of the Gods: Californian-Australian Environmental Reform, 1860-1930* (University of California Press, 1999) がある。あえて、非アメリカ人であるオーストラリア人研究者によるアメリカ史の著作に着目するのは、二つの理由がある。一つは、非アメリカ人であるが故に、アメリカ人には見えない視点で捉える解釈、特に環太平洋的な視点 東アジア、オーストラリア・ニュージーランド及び太平洋諸島とアメリカの関係の諸例(後述)が示すように が本書にはちりばめられている。それらを、同じ非アメリカ人であり、かつ同じく環太平洋世界に生きる我々は共有でき、かつ共感を呼ぶものと考えからである。他の理由は、私的なもので、私がティレル先生と学会(2006年名古屋の「日本アメリカ学会」大会、上記2007年リスボンの「国際アメリカ学会」、2009年シアトルの「アメリカ歴史家協会」大会)で知り合い、それ以来、ティレル先生の博識と良識に強い印象を受け、また先生の歴史観に影響を受けてきたことである。上記リスボン大会で報告したトランスナショナルな視点に基づく拙稿を読んで頂き、それをオーストラレーシア地域のアメリカ学会誌に投稿を薦めてくださったのがティレル先生である⁽³⁾。

ティレル先生の御著書は、そのタイトルのとおりトランスナショナルなアメリカ史研究を象徴するものである。「序章」から引用すると、従来のアメリカ史の概説は、主として、「国内」の「出来事や議論・・・によって決定された軌道」を描いてきた。このような一國史的叙述は、1970年代前後に盛んになった社会史研究によって、階級・人種・ジェンダーが注目され、アメリカの多様性が強調されたが、しかし、それはあくまで国家の「内」での多様性であり、「国境に関しては不可侵なままであった」。こうした従来の叙述に対して、本書は、トランスナショナルな視点から、1789年以降のアメリカ史の簡潔な概観を提示する。著者は、トランスナショナルなテーマの歴史を組み立てる上で必須のアメリカ史の概説的な歴史研究及びそのテーマに関して過去15～20年間に蓄積された膨大な数の専門書を渉猟し、それらの諸研究を一冊にまとめた。

第一章「諸帝国の戦いの中に生まれて 戦争と革命の中のアメリカ、1789年～1815年」では、環大西洋世界及びアメリカス世界を意識してアメリカ史が叙述される。まず、アメリカ独立とフランスとの関係を、単に両者が政治的、思想的に影響し合ったと叙述するのではなく、フランス滞在中のトマス・ジェファソンに関する下記の史実を挿入し、現実の人的交流を通じたフランス革命との関係を叙述して、アメリカ独立建國史を描き始める。1789年、「6月13日、ジェファソンが乗った馬車の周りで殴り合いをする群集を目撃したが、彼らは、翌日に再び集まってバステューユ牢獄を襲撃する険悪な様子の人々と同じ人々であった。8月、ラファイエットら穏健派の政治家たちは、憲法制定について議論するために、ジェファソンの家で会合した」。そして、アメリカ独立革命とフランス革命の関係について、「何千マイルも離れた喋が羽をばたばたさせて与えた影響のようなもの」という表現を用いて、両者の結びつきを締めくくる。大西洋・地中海上でのトランスナショナルな関係として、「18世紀の大西洋は、海賊たちと同様に多くの国々の水夫が活動する場であった。このような下層レベルでの人々の混じり合いは必然的にトランスナショナルな交流を生み、その中で、船乗りの文化がカリブ海、北アメリカそしてヨーロッパの港湾都市の周辺に広まったのである。大西洋貿易の船上で、多くの異なる人種・エスニック集団が自由につき合い、また忠誠を誓うべき国家を取り替えた」と記す。アメリカス世界に関しては、ハイチの独立革命がアメリカ南部の黒人奴隷に与えた影響につい

て、次のような事実を挿入して、南北アメリカ世界の関係性を強調する。「15,000人以上のハイチの白人、混血、そして自由黒人たちが奴隷を連れて、アメリカ南部諸州、特にヴァージニアに逃げてきた。その他の人たちは、スペイン領ルイジアナに行き、彼らの多くが1803年以降にアメリカ市民となった」。

しかし、東アジアに住む我々にとって特に注目するのは、環太平洋的な視点であろう。著者が「アメリカのトランスナショナルな関係の基盤は、基本的には、19世紀と20世紀初頭につくられた」と述べて重視する19世紀後半を扱う第8章から、環太平洋的な史実の例を引用すると、「1867年に横浜（後に中国に延長）まで、…定期航路が開設されたことによって、環太平洋の旅が以前より容易になり、そして1898年までに六隻の多数の乗客で混雑した定期船が運行した。サンフランシスコ・横浜間の旅は1886年に22日間であったが、1898年には12日以内になった。一方、19世紀末に多くの社会批評家たちがニュージーランドやオーストラリアに行ったが、彼らは、1875年に開始されたハワイ経由の定期航路を利用した」。太平洋定期航路と並んで国際海底電線網の敷設についても記し、1870年代までに発展したこれら交通・通信網によって、例えば、革新主義ジャーナリストのヘンリー・ロイドが、旅行家ジョージ・フランシス・トレインが、そして女性キリスト教禁酒同盟(WCTU)の書記メアリー・レビッドがそれぞれ太平洋を越えた事実に触れ、WCTUにみるように、女性とトランスナショナル史観との関係を指摘することも忘れない。字数制限のために、これ以上の例を挙げるができないのが残念であるが、本書のトランスナショナルな歴史観は十分に伝えられたものと思う。

I. Tyrrell, *Transnational Nation* (2007年) から学ぶもの 結びに代えて

翻って、現代の日本社会を考えてみると、「北朝鮮問題」で騒ぐメディア、国旗・国歌による「愛国心教育」で国民統合をはかる政府など、日本はナショナリズムが煽られる状況にあり、特にグローバル化が進む最近この傾向が著しい。このナショナルな状況を冷静に客観的に見るためにも、筆者が一ファンである博徒兼業作家の森巢博（現在、オーストラリア在住。オーストラリア国立大学教授のテッサ・モリス＝スズキ Tessa Morris-Suzuki の夫）の言を俟つまでもなく、まさにトランスナショナルな視点が必要とされている⁽⁴⁾。このような視点を得る一手段として、一国史的な枠組みを越える歴史観や双方向的な対外交流の観点を説く *Transnational Nation* から学ぶべきものは多い。以上のように、ナショナリズムとグローバル化の渦中にある現代日本の社会及び学界の両者にとって、本書の出版は非常に意義深い。

<注>

- (1) 藤本茂生「2003年回顧と展望：北アメリカ」『史学雑誌』2004年度5号（2004年6月）399-403頁。
- (2) JTASに関しては、<http://repositories.cdlib.org/acgcc/jtas/> を、アメリカ史の著作に関しては、例えば、Thomas Bender, *A Nation Among Nations: America's Place in World History* (2006) を、それぞれ参照。
- (3) Shigeo Fujimoto, "Transpacific Boy Scout Movement in the Early 20th Century: The Case of the Boy Scout Organization in Osaka, Japan," *Australasian Journal of American Studies* (December, 2008) vol.27, No.2, pp.29-43.
- (4) 森巢博『越境者のニッポン』（講談社現代新書、2009年3月）を参照。

（帝塚山大学人文科学部教授）

文学の中のアメリカ生活誌 (51)

新井 正一郎

Tavern and saloon (居酒屋と酒場) 1620年9月6日、メイフラワー号という小さなワイン輸送船で、英国本国を離れたピルグリム・ファーザーズ(巡礼始祖)たちは、食用に塩漬けの牛肉、干し魚、パン、乾チーズ、バターなどの他、かなりの量のワインやビール(エール)を船倉に積み込んでいた。なぜ彼等が酒を旅に携えてきたかということ、酒は聖職者によって「神のよき贈り物」とみなされていたからだ。そういうわけで、植民地時代の開拓村には、入植者がいつも牧師と一緒にいることができるように、集会所(教会)の近くにordinary(居酒屋、17世紀末頃まで使われていた言葉)があった。マサチューセッツのフィッチバーグのような教会がなかった地域では、祈りも居酒屋で行われた。当時の居酒屋は飲食の場所であり、馬預けであり、祈りの場であり、泊る場であり、談笑の場であった。その後イギリス領植民地の多くは、住民や旅人の楽しみの場所として居酒屋を設けることを、その町の特許状を受け入れる条件にした。町が居酒屋の仕事を始めた住民に余地や牧草地を提供するのも珍しくなかった。特許状を拒否された町は、週20シリングの罰金を払わなければならなかったからである。ordinaryの亭主は、地元有力者がなった。マサチューセッツ州ケンブリッジの居酒屋を例にとると、教会の執事、その後大学の事務長がその持ち主であった。

18世紀になると、ordinaryに代わってtavern(小屋を指すラテン語のtabernaと、フランス語のtaverneから)が居酒屋を意味する言葉として、盛んに用いられるようになった。

1720年代には、未亡人の多くがタヴァーンのきりもりや蒸留酒の製造の仕事を任せられども、1800年以降、その数は際立って減った。独立戦争では、ほとんどのタヴァーンが主要な政治的、社会的な出来事の舞台となったことは注目している。John Adamsは、巡回裁判へ向かう途中立ち寄ったタヴァーンで自由農民の英国への不満を初めて知ったとしるしている。「ボストンから40マイル離れたシルーズベリーのタヴァーンで一晩泊った。ぬれた服と鞍をかわかすため、十分燃えている火の側に坐っていた。(略)すると、6人ないし10人ほどのがっしりした自由農民が入ってきて、政治について活発に意見を交わしはじめた。1人がボストンの連中はあわてふためいていると言うと、もう1人が当然のことだと言った」。この種の不満の輪が広がり、植民地の主な町にthe Sons of Liberty(自由の息子)と呼ばれた過激な反英過激グループが結成された。彼等はliberty tree(自由の樹)という木を共有地に植えたり、抗議のシンボルとしてliberty pole(自由の旗竿)を立てた。その頃の記録によると、1769年8月14日、ボストンのthe Sons of Libertyは自由の樹の下で集会を開いた後、Liberty Tree Tavern(自由の樹亭)に席を移し、バーベキューの夕食をとった。紅茶を満載した英国船がボストン湾に停泊した時には、茶税に抗議したボストン市民たちは、青龍亭という屋号のタヴァーンに集まり、密議を交わした。戦争が始まると、志願兵は大陸軍(アメリカ軍)の司令部であった居酒屋で宣誓し、前線に向かった。戦況がイギリス軍に非となると、居酒屋の多くの亭主はその看板の名称を変えることで王党派的イメージの改善に努めた。つまり王冠、国王の紋章、ライオンなど英国を象徴する看板名を廃し、アメリカの鷲、新しい国家の指導者であるGeorge WashingtonやBenjamin Franklinの名を屋号にとり入れるようになった。1816年、ペンシルバニア州ホルメスバーグのタヴァーンの主人は「善良な、高潔なアメリカ人の皆さん。目的が商いであっても、もてなしであってもいいですから、ワシントン亭に是非立ち寄り、元気をおつけください」という広告を出している。作家Washington Irvingは『スケッチ・ブック』(1819)所収の短編「リップ・ヴァン・ウィンクル」のなかで、20年ぶりに故郷に戻ってきた主人公リップが、馴染みの居酒屋の看板が変わっていることに気づいたときのことに触れて、「看板

にはジョージ国王の赤ら顔を認めた。(中略)しかしこれさえ奇妙な姿に変わっていた。赤い服は青と浅黄色の服にかわっていて、(中略)下に大きな文字でジェネラル・ワシントンとあった」と書いているのは、その風潮の反映である。

主要道路や橋等インフラ整備への投資が拡大されていくと、旅の原動力であった駅馬車が行き来する道路沿いのタヴァーンには、さまざまな階級の客 聖職者、政治家、小役人、裕福な商人、職人、水夫、農民、馬車の客など が出入りした。郵政副長官時代のBenjamin Franklynは、ワシントンとフィラデルフィアの往復の途中、タヴァーンに立ち寄ることを好んだ。

18世紀後半、ニューハンプシャー州、ウォルポールという小さな町のCraft's Tavern(クラフト亭)は、ウォルポールの文学クラブとも呼ばれ、文人たちが集まる酒場として有名であった。アメリカ最初の文筆家Charles Brockden Brownは、そこで*Lay Sermons*を書き上げた。戯曲*The Contrast*、小説*The Algerine Captive*の著者Royall Tylerもその常連客だった。当時のアメリカのタヴァーンはトランプ、サイコロ、七面鳥撃ちなどの賭け事が行われ、サーカスが見られるところでもあった。

19世紀の初頭、急成長を始めたニューヨークに新しい人生を求めて、地方や海外から多くの人々が集まってくると、市は下宿屋や居酒屋の宿泊施設だけで対応できないと判断し、1792年、ブロードウェイの西側にニューヨーク初のシティ・ホテル(5階建て、137部屋)を建設した。外観はひかえめだったが、内部は高尚の客にあわせて、宿泊室のほか、ウェイターが多くいる広い洒落た食堂があったので、これ以後居酒屋は主として、労働階級の集まるところになった。

この頃には、蒸留酒の値段は1ガロン25セントで、紅茶やコーヒーより安かったので、ニューヨークに次々とやってきた貧しい連中は、都心部の飲み屋や棟割長屋地区のほとんどの街角にあったgrocery(食料雑貨店)やgreen grocery(八百屋)に足しげく通った。酒やコップや野菜を扱うことをおもてむきの商売にしていた食料雑貨店と八百屋の多くは、夜になると職人や店員向けに店の奥に酒場を開くようになったからだ。記録によると、1819年には、市内の1300軒の食料雑貨店と160軒の居酒屋が蒸留酒販売を許可された。1827年までには、許可を得た酒の販売店は3000軒以上まで増えた。その一方で、酒販売の許可法に違反する酒場、いわゆるspeakeasy(もぐり酒場、元はこの語はハイフォンのついたspeak-easyという形で用いられていた)も沢山あった。中でも有名な店は、禁酒時代のTexas Guinan Clubであった。

saloon(酒場)は、「大広間」を指すフランス語salonに由来する言葉で、1840年頃にアメリカ英語に入った。この時期、ニューヨークに溢れていた間借り人たちにとって、繁華街のタヴァーンがどんなに汚くても、憩いの場となっていたように、saloonは「棟割住宅地区」で暮らす貧しい労働者たちにとっては、飲食や談笑ができるだけでなく、仕事や貸付金を斡旋してくれる温かい避難所となっていた。saloonは、ほとんどの通りにあったが、特に立地条件の良い街角に群がっていた。ここからcorner saloon(コーナー・サルーン)という語ができた。なお、高級なsaloonは、free lunch(無料の昼食、1840年頃という言葉)を出して、客を呼び寄せていた。saloon keeper(酒場の亭主)は1860年にできた言葉である。

19世紀の半ばになると、concert saloon(コンサート・サルーン、1840年頃という言葉)という新しい酒場が生まれた。コンサート・サルーンと従来の酒場との違いは、酒のほかに歌やダンスやボードビルを夜通し提供できること、楽士(主に黒人)またはピアノ奏者を雇っていること、それに地下に降りたところに位置していることだった。1872年までには、この種のサルーンはニューヨークに80軒近くあった。その多くはバッキンガム宮殿、ストランドなどイギリスの風景を連想する名称そのままを店名にしていた。コンサート・サルーンという言葉は1905年頃には姿を消すが、約半世紀の間、都市風景の一部となっていた。

(天理大学名誉教授)

Essay

ノンネイティブESL教師が抱える問題とTESOLプログラムの改善点 北米の現状を中心に

小林 千穂

TESOLとは、Teaching English to Speakers of Other Languages(他言語話者に対する英語教授法)の略称で、英語以外の言語を話す人々に対する英語教授法のことであり、TESOLプログラムとは、英語以外の言語を第一言語として話す人々に対する英語教育を行う教員を養成することを目的としたプログラムである。現在、北米を含む英語圏のTESOLプログラムには、数多くのノンネイティブの学生が在籍している。ある統計によると、英語圏のTESOLプログラムに在籍している学生の半数近くがノンネイティブスピーカーである。これらの「ノンネイティブスピーカー」の中には、日本や韓国のような非英語圏からの留学生、インド、シンガポールのような準英語圏からの留学生、これらの非英語圏、準英語圏から様々な年齢で英語圏へ移住した者など、様々な立場で英語を話す者が含まれる。彼らが置かれている状況は全く異なるが、共通しているのは「ノンネイティブ」という立場のために、卒業時に就職活動において、また就職した場合もその就職先で色々な困難や偏見を経験するということである。

非英語圏であってもノンネイティブの学生が就職先を探すのは容易でないが、北米を含む英語圏でESL(English as a Second Language 第二言語としての英語)教員としての雇用を求める場合は、就職活動において特に大きな困難を経験する。北米のTESOLプログラムを卒業した者の主要な就職先である大学付属英語集中講座は、従来ノンネイティブスピーカーをほとんど採用してこなかった。プログラムの中には、教員のすべてがネイティブスピーカーであることを売りにし、公然とネイティブスピーカーのみを雇っていたところさえあった。ここ10年、TESOL NNEST(Nonnative English Speakers in TESOL)Caucus(TESOLにおける英語非母語話者コーカス)などを中心に、ノンネイティブ英語教員に対する差別を撤廃する運動が高まり、状況は少しずつ改善されてきてはいるものの、依然として厳しく、彼らが北米で英語教員としての職を得るチャンスは極めて低い。採用にあたって差別的待遇を受けるのは、準英語圏出身の「ノンネイティブスピーカー」も同様である。訛りのある英語を話す彼らは、北米では、ネイティブスピーカーとは見なされないのである。

難関を突破し採用された場合も、ノンネイティ

ブスピーカーは、就職先で偏見や困難を経験する。第一に、生徒からの偏見がある。生徒の中には、ノンネイティブ教員を嫌がる者やノンネイティブ教員を信頼できないと感じる者もいる。また、生徒の教員に対する態度には、教員の人種や、訛りも複雑に影響しており、生徒は白人の教官のみがネイティブスピーカーであり、正しい英語を話すと思う傾向があるようである。さらに、ノンネイティブ教員は、同僚からも差別的な態度をとられることがある。ネイティブ教員の中には、ノンネイティブ教員が自分より劣っていると考えたり、彼らの英語教員としての正当性を疑う者もいるようである。

ノンネイティブ教員が経験する困難の原因の一つに、Phillipsonがnative speaker fallacy(ネイティブスピーカーに対する誤信)と呼ぶ、ネイティブスピーカーこそが理想の英語教師であるという考えがあると思われる。この誤信の根底にあるのは、Chomskyの、ネイティブスピーカーがその言語に関しての権威であるという考え方である。このネイティブスピーカーの言語能力における優越性が、その言語を教える能力にまで適応され、ネイティブスピーカーがその言語を教えることに関しての権威であるとされるのである。しかし、現在では、Chomskyの理想化されたネイティブスピーカーは、実在しない「言語学上の神話」であると考えられている。また、仮にネイティブスピーカーがその言語に関しての権威であるとしても、ネイティブスピーカーのほうがノンネイティブスピーカーに比べて教師として優れているということにはならない。ネイティブ教員は、英語力に対する自信、柔軟な教え方などの点で、ノンネイティブ教員よりも優れているのに対し、ノンネイティブ教員は、英語に関する知識が深い、生徒の力を的確に把握できる、生徒が抱える問題を予測できるなどの点で、ネイティブ教員よりも優れていることが指摘されている。

このようにノンネイティブの学生は、TESOLプログラム卒業後、就職活動や職場で深刻な問題を抱えるが、現在のところ、大半のプログラムでは、このような現状を改善するために何ら対策をとっていない。これでは、ノンネイティブの学生に対して、出口のないトレーニングを与えているようなものである。TESOLプログラムは、ノンネイティブの学生の独自のニーズを考慮したカリキュラムを用意する必要がある。第一に、カリキュラムの中に、ノンネイティブ教員が抱える問題について学び、他の学生や現役のノンネイティブ教員と議論する機会を取

り入れる必要がある。こうした経験を通して、学生は自分たちの問題を深く理解し、それによりよく対処できるようになるであろう。第二に、ノンネイティブの学生の中には、英語についての知識はあっても、英語運用力がない者も多い。こうした学生のために、流暢な英語力を伸ばすための授業をカリ

キュラムに取り入れるべきである。第三に、ノンネイティブの学生が将来、同僚やその他の関係者と健全な関係を築くことができるように、北米の文化、特に学校における文化について、意識的に学べる機会を設ける必要がある。

(天理大学国際文化学部講師)

Essay

越境するツバメたち メキシコ、ゲレロ州 山岳部農村とシナロア州農場地帯をむすんで

小林 貴徳

本報告は、天理アメリカス学会第13回年次大会の開催に合わせて出版された『アメリカス世界における移動とグローバリゼーション』(天理大学アメリカス学会編)に寄稿した拙稿(第11章)にもとづくものである。研究の目的は、メキシコ国内における季節農業労働者の移動形態の実態を明らかにするとともに、労働の場所となる移入先社会と送出元である農村コミュニティとのあいだの季節的移動に身を委ねる還流型移民が、社会的行為主体として母社会において果たしうる役割の可能性を探ることである。

移民に関する研究には相当の蓄積がある。しかしメキシコ国内の還流型移民については、母社会からの一時的な離脱に過ぎず、基本的に農村社会の一員であることみなされがちであり、移民研究からも農村研究からも、副次的なものとして片付けられる傾向があった。そうした先行研究では、季節農業労働者は世界経済の統合化のなかで解体される農村コミュニティの住人、グローバル化にさまよう現代の流民として扱われることが多く、受動的な被害者としての側面が強調されるとともに、彼らの主体性が考慮されないままであった。

グローバル化社会における人の移動を検討するうえで、リオ・グランデを越え北を目指すトランスナショナルな動きだけではなく、メキシコ国内の動向にも意識を向けることが必要である。それは、90年代以降急速に進展する農業の工業化および農産物流通のグローバル化にともない、国内のローカル労働市場が広域にわたって再編成されているためである。メキシコにおける労働力の需給バランスの再編を検討することによって、国境を越えなくとも国内の「北」と「南」の関係が再構造化されている点、また、その動向には現代社会の諸問題が凝縮されている点について問い直すことができるだろう。

本研究では、季節農業労働者の生の実態と彼らの行為主体としての可能性について検討するために、

季節移民の送出元としてメキシコ南東部ゲレロ州山岳部の先住民農村社会を、また、移民の移入先としてメキシコ北西部シナロア州農場地帯を事例とする。

メキシコにおける労働市場の再編には、国際市場での競争力強化を意図した新自由主義政策の推進が最大の要因となっていた。政策の一環として、北米地域への青果物輸出促進をねらいとした大規模な灌漑地帯が計画され、とくにメキシコ北西部には巨額の公的援助と集中的な資本投下による農産業が発展した。その一方、先住民言語使用者の比率が高い南東部では、基礎食糧生産の低迷にともなって従来型の農村経済に危機的状況が続いていた。農村社会の住人にとって補完的な経済手段の模索が課題となっていたが、彼らは同時に、コミュニティ成員であり続けるために課される義務(共有地の継続的利用など)という問題も抱えていた。

こうした状況にあって国内のローカル労働市場の再編が広域におよび、また「北」と「南」の再構造化が加速化した要因として次のような点を指摘することができる。

(1) 北西部農場で労働需要が高まる時期が南東部農村における伝統農業の農閑期に相当するため、季節移民という選択肢は、農業労働者として賃金を得ながら地元農業との両立を可能にする点。(2) 労働力の需要と供給の接合点、すなわち雇用契約の局面において、雇用者と被雇用者とを結ぶ地元の雇用斡旋人の「制度」が定着したことにより、移民希望者は独自のルートを開拓することなしに農業労働者となれる点。(3) 雇用の集団化に応じて、同一村落出身者で構成される労働者の組織化が進み、その結果、家族や親族など女性や未成年を多く含む労働班が形成されている点。(4) 北西部諸州の地理的に離れた農場間で、季節労働力の「分有」が意識されるようになってきたため、ひとつの農場と母社会を行き来する「振り子移民」から、数箇所の農場を点々としながら母社会を行き来する「ツバメ移民」へと移動形態が変容しつつある点。つまり、季節農業労働者をめぐる一連の動きは、雇用者と被雇用者の複

合的な依存関係を考慮しなければならず、さらに、職場となる農場は、両者の思惑や個別の利害が交錯する場であること、そしてそれが実践される戦略的な空間であると考えらる必要がある。農業労働者でありながらコミュニティ会員であり続けることは、生を維持するための場所、つまり彼らの生の舞台となる領域を拡張する試みであるとも言える。

季節農業労働者が運ぶモノやカネは、いまや母社会に対しておおきな影響力を持つにいたり、帰郷者の出資による教会の補修や伝統的祝祭の活性化といった経済的社会的貢献もみられる。さらに、帰郷者が知識や技術など社会発展を促す情報を運ぶ媒介作

用を果たしうることを考慮するならば、季節労働者が母社会に対して及ぼす影響は経済的側面のみには留まらない。例えば、次期の移民を想定した帰郷者間のインフォーマル・ネットワークの形成や、新たな労働班の組織化にともなう移民の再生産などは、コミュニティ内の紐帯強化として作用している。また、農場で経験的に獲得された技術や知識の地元農業への応用や、母語や自文化の再評価を推進する小集団の形成など、帰郷者を介した副次的作用として「内から」および「下から」の社会的発展の多様な可能性が秘められている。

(神戸外国語大学大学院)

卒業式式典後

「酒本真理子賞」を授与

天理大学アメリカス学会では、去る3月22日の卒業式当日に恒例の「酒本真理子賞」をヨーロッパ・アメリカ学科の英米語、イスパニア語、ブラジルポルトガル語の各コースにおいて選出された最優秀論文執筆者に授与した。授与式は、卒業式式典直後に開かれ、上記3コースの各コース教員・卒業生が参列したクラス会の席上、以下の受賞者4人にそれぞれ賞状と図書カード2万円分の副賞(英米語コースのみ受賞者が2名につき図書カードを折半)が手渡された。

この「酒本真理子賞」は、1989年度に旧外国語学部英米学科を卒業し、1年後に志し半ばにして白血病で亡くなった酒本真理子さんに因んで贈呈されるようになった。彼女の父親の酒本昌彦氏から、「後輩の育成とアメリカス学会の出版活動に役立っていただきたい」と毎年寄付を頂いているが、その一部を「酒本真理子賞」として授与している。

英米語コース：相川弘史・山本理絵

相川弘史: “The Impacts of ‘National Day of Action’ on First Nations People and Canadian Society”

[英語論文][“ナショナル・デー・オブ・アクション”が先住民とカナダ社会に与えた影響]

山本理絵: “Vietnam Veteran’s PTSD in *Full Metal Jacket*” [英語論文][映画『フルメタル・ジャケット』に見るベトナム帰還兵のPTSD]

イスパニア語コース：大森滯

“La historia de las relaciones entre Centroamérica y los Estados Unidos: El punto de vista de Japón y Costa

Rica” [スペイン語論文][中米と米国の関係史 日本とコスタリカの視点]

ブラジルポルトガル語コース：伊福幸子

「ブラジリアン柔術と柔道」

編集後記

天理大学アメリカス学会の研究誌『アメリカス研究』第14号は、本年11月に開催の年次大会に合わせて発行します。『アメリカス研究』巻末に掲載の投稿規定に則り、奮ってご応募ください。原稿締切は8月31日です。

天理大学アメリカス学会の2008年会計年度は、昨年11月29日に開催の年次大会当日にスタートしました。2009年度の年会費(一般会員:5,000円、賛助会員:1口30,000円)を未納の会員の皆様は、郵便振込取扱票にて指定口座(下記参照)宛にお振り込みくださいますよう、よろしくお願い致します。

口座番号:00900-5-70364

加入者名:天理大学アメリカス学会

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお寄せください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 60: 2009年5月5日発行)

編集者: 片倉充造

〒632 8510 天理市杣之内町 1050

天理大学アメリカス学会

電話: 0743-63-9076

Fax: 0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/